様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０７４３

研究課題名（和文）戦時下の軍隊とスポーツの比較社会史

研究課題名（英文）Military and Sports during the Wartime, A Comparative Social History

研究代表者
高嶋　航（Takashima, Ko）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：１０３０３９００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はこれまでまったく研究の対象となってこなかった日本の軍隊におけるスポーツの実態とその意義を明らかにするものである。具体的には、明治の建軍から第二次世界大戦に至る陸海軍のスポーツ実践を跡づけ、それを諸外国の事例と比較した。その結果、日本の軍隊におけるスポーツの盛衰は日本社会における男性性の変化と密接に結びついていることが明らかになった。その知見は著書『軍隊とスポーツの近代』などで公表した。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the Japanese military’s perception of Western sports from 1873 to 1945, and revealed how and why specific military institution in specific time encouraged or discouraged Western sports. It also referred to the particularities and commonalities of Japanese experience by comparing to several European and North American militaries. It became clear that the shifting masculinities in Japanese society at large affected the degree of promotion and exercise of Western sports in Japanese military.

研究分野：スポーツ史

キーワード：軍隊　スポーツ　男性性

１．研究開始当初の背景

戦時下にスポーツ（体操や武道を除く、いわゆる「外来スポーツ」）が軍の圧力によって停滞を余儀なくされた、というイメージは根強く残っている。しかし、それは本当に軍の圧力によるものか、もしそうだとすれば、それはどのような圧力であったのか。戦時下のスポーツに関する本格的な研究は、申請者の一連の研究を含めて、ようやく始まったばかりであった。戦前、戦時中の日本社会における軍隊の役割を考えるならば、従来のスポーツ史研究において軍隊が見過ごされてきたのは、致命的な問題である。

一方、軍事史の側では、軍隊を社会や経済、文化との関連でとらえなおす「広義の軍事史」が近年盛んになっている。このような研究動向を受けて、欧米では軍隊とスポーツに関して多くの研究が蓄積されつつある。これらの研究で、軍隊とスポーツを結びつける概念として重視されるのが「男性性」である。軍隊とスポーツは、いわば当該社会の男性性を映し出す鏡であり、男性性に着目することで軍隊とスポーツの態様をより広い文脈のなかに位置づけ、より分析的に描き出すことが可能となる。日本でも「広義の軍事史」や軍隊の男性性に関する研究がはじまっているが、スポーツを対象とするものはない。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の３点である。

(1) 日本の軍隊におけるスポーツの実態、およびその変遷を明らかにすること。
(2) 欧米の軍隊・スポーツとの比較を通じて、日本の特徴、問題点をあぶり出すこと。
(3) スポーツを通じて、日本の軍隊と社会のジェンダー、とりわけ男性性の役割を解明すること。

３．研究の方法

上記研究の目的のそれぞれに対応する研究の方法を記す。

(1) 基本となる資料は、日本軍の内部文書、戦記、回想録、当時の新聞、雑誌などである。日本軍関係の資料は防衛省防衛研究所、靖国文庫、水交社、自衛隊などに保管されており、これらをできるだけ広く収集したうえで、戦時下日本の軍隊とスポーツの実態を解明する。
(2) 日本軍のスポーツ実践になんらかの影響を与えたイギリス、フランス、ドイツ、アメリカの軍隊とスポーツについて、既存の研究をフォローし、日本軍と比較可能な論点を整理する。
(3) 戦時期の日本（と欧米）におけるジェンダーに関する資料、研究を整理し、ジェンダーの視点から軍隊のスポーツをとらえる。

４．研究成果

本研究の主たる成果は『軍隊とスポーツの近代』として公表した。以下、同書で明らかにしたことをまとめる。

日本の海軍はイギリス軍にならったこともあり、建軍当初からスポーツが導入された。したがって、日本の海軍はスポーツを男らしさを損なうものとは考えなかったが、ダンス（ヨーロッパの士官には基本的教養の一つだった）のように男らしさを損なうと見なされたものは取り入れられなかった。海軍のスポーツは海軍兵学校、海軍機関学校など士官養成学校を起点に各艦隊、各鎮守府へと拡大した。スポーツがとりわけ盛んになったのは1920年代に入ってからで、この時期には日本の民間社会でもスポーツが盛んとなった。また、当初は士官に限られていたスポーツは、下士官や水兵にも広がっていく。その背景には、教育水準の向上、教育機関でのスポーツ実践の拡大がある。1920年代に海軍で人気のあったスポーツは野球、テニスであったが、新興スポーツのサッカー、バレーボール、バスケットボールなども取り入れられた。

日本の陸軍はドイツ軍にならったことから、建軍当初に重視されたのは体操であり、スポーツは取りあげられなかった。やがて1890年代から陸軍幼年学校でサッカー、テニス、クリケット、ベースボールなどが導入されるが、それが可能になったのは同校の生徒が一人前の軍人とは見なされておらず、スポーツが陸軍の男らしさと抵触しなかったからである。陸軍でスポーツが大々的に取り入れられるのは 1920 年に入って以降で、姫路の歩兵第 39 連隊、陸軍戸山学校、陸軍士官学校がその中心となった。陸軍のスポーツはほぼ全国に及び、台湾、朝鮮、満洲も例外ではなかった。陸軍で人気のあったスポーツは第一に野球で、テニス、陸上競技、サッカー、ラグビー、ホッケーも盛んだった。なかでもホッケーは全国選手権に優勝するほどの実力を有し、大日本ホッケー協会の役員には陸軍軍人が多数就任した。しかしながら、陸軍内にはスポーツの流行を快く思わない人々がおり、士官たちに読まれた雑誌『偕行社記事』では、1922年から翌年にかけて、スポーツの是非をめぐる論争が交わされた。スポーツ肯定派が第一次世界大戦後の欧米各国の経験に学ぼうとしたのに対して、スポーツ反対派は国粋主義的、農本主義的、精神主義的立場を取っていた。後者は、スポーツが外来物であるがゆえに否定されるという戦時中の現象を先取りするものでもあった。外来スポーツをそのまま取り入れた海軍と違って、陸軍はスポーツの適用可能性を真剣に検討し、『体操教範』では籠球、投球戦、球戦が推奨された。後二者は陸軍独自のスポーツである。このように陸軍は既存のスポーツに不満を持っており、その不満が戦時中に民間スポーツ界に干渉していく契機となった。

陸海軍でスポーツがひろく実施された1920 年代は日本社会の男性性に大きな変化が見られた時期である。第一次世界大戦後の厭戦感情、デモクラシー思潮の流行は、これまで日本人の男らしさを体現してきた軍人に対する見方を大きく変えた。端的に言えば、軍人は男らしくない存在となり、スポーツが新しい時代の男らしさを体現することになったのである。おりしも、1920 年代には軍縮が敢行され、軍関係者の危機感が高まった。軍のみならず天皇制も危機にさらされていた。第一次世界大戦の結果、少なからぬ皇帝や王が廃位に追い込まれた。また、社会主義が流行し、天皇の存在意義に疑問符を突きつけた。当時 20 代にさしかかっていた若き皇族たち（皇太子、秩父宮、久邇宮、閑院宮ら）は軍人＝スポーツマンの姿を人々に示した。このような状況のもとで、軍隊とスポーツと天皇制が男性性という媒介項によって結びつくことになった。

イギリスはスポーツの先進国であったが、それでも軍隊でスポーツが盛んになるのは1860 年代以降のことである。すなわち、明治日本が目にしたイギリス軍のスポーツは、きわめて新しい現象であった。士官の間ではクリケット、兵士の間ではサッカーが人気で、それぞれ士官、兵士としての資質を養成するものと見なされていた。大量の市民兵を召集した第一次世界大戦で、スポーツは市民から兵士への移行をスムースにする役割を果たし、大戦後半には正式に軍隊のプログラムの一環として制度化された。アメリカでこのような役割を果たしたのは野球であった。野球は軍隊を通じて「国民的娯楽」となった。アメリカでは YMCA などの宗教組織が軍隊内でのスポーツ振興に大きく貢献した。これに対して、スポーツより体操が重視されたフランスやドイツの軍隊では、第一次世界大戦中、あるいは戦後に徐々にスポーツの価値が認識されるようになる。とりわけ軍備が制限されたドイツでは、スポーツが軍事訓練の役割を果たすことになった。以上のような欧米軍の経験は間接的に日本軍に伝わるが、日本軍が直接軍隊のスポーツを目にする機会もあった。ドイツ軍の捕虜である（この主題については例外的に研究が豊富にある）。

海軍では 1930、40 年代を通じてスポーツは盛んだった。20 年代との大きな違いはラグビーが重視されたことで、1942 年にはラグビーをもとにして「闘球」とう海軍独自のスポーツが考案された。チームワークを養うとされたバレーボールの重視もこの時期の海軍の特徴である。呉海軍工廠のバレーボールチームは全日本大会で何度も優勝、準優勝している。

一方、陸軍では皇道派の台頭にともない、外来の事物であるスポーツへの敵視が高まっていった。スポーツマンの男らしさと軍人の男らしさがもはや同一視されることはなくなったのである。とはいえ、日中戦争が勃発し、大量の召集兵が軍隊に入ってくると、娯楽の問題が生じる。また、スポーツは占領地での宣伝工作や傷痍軍人のリハビリにも有用なことが認識されるようになる。こうして、スポーツは陸軍内に広まり、その足跡は国内は言うまでもなく、中国、フィリピン、シンガポールに及んだが、かつてのように訓練の一環として実践されたわけではなかった。陸軍内のスポーツに寛容であった陸軍当局だが、民間社会のスポーツには高圧的な姿勢を取るようになる。太平洋戦争の開戦はとりわけ戦時下にスポーツをすることの意義を失わせた。もっとも、陸軍はスポーツそのものを「弾圧」したのではない。陸軍が問題視したのは、将来の士官候補たる男子学生が軍事的訓練に専念しないことであった。彼らは当時のスポーツ界の中心であったため、陸軍の圧力はスポーツ界全体に対するもののように考えられているが、実際には陸軍内部だけでなく、民間の女性や老人に対するスポーツはむしろこれまで以上に奨励されていたのである。

たしかに戦時中の日本軍では広くスポーツが実践されていたものの、アメリカ軍と比べると、雲泥の差であった。アメリカの参戦目的は「アメリカの生活様式を守ること」であり、たとえ軍隊のなかでも、それは貫徹されねばならなかった。それゆえアメリカ軍はできる限り市民社会の流儀を維持しようとした。もちろん、スポーツもその一環であった。娯楽はアメリカ軍にとって必要不可欠な重要事業であった。これに対して、日本軍は軍隊内部で市民社会の論理が通行するのを極力抑えようとした。たまさかの娯楽は恩恵にすぎず、アメリカ軍のように組織的に実践したものではなかった。娯楽を担当する軍人は、その必要性を認識しつつも、「こんなことに浮身をやつし、それで自負などしているのかと詰問されれば私はただ憮然たる外はない」と、自己の任務に誇りを持てなかった。そのため、娯楽の多様化、充実化を図ろうとはしなかった。慰安所の問題もこのような陸軍の娯楽観に由来する。

以上が『軍隊とスポーツの近代』の主旨である。このほか、「辮髪と軍服」では、近代中国の軍隊における男性性の問題を検討した。文武両道を理想とした江戸時代の日本と違って、文を武よりも遥かに高く評価する前近代中国では兵の社会的地位は著しく低かった。こうした伝統的男性性に再編を迫ったのが日清戦争での敗戦であり、日本を参照軸として軍事的な男らしさを高く評価する新しい男性性が構築されていったことを論じた。本稿では論じ切れなかったが、中国の軍隊におけるスポーツは、日本軍とは違って、

軍人の男性性と矛盾することはなく、連合国側で戦った第二次世界大戦のさなかでも、スポーツが奨励され、中華民国、中華人民共和国のいずれにおいても、軍隊は全国運動会で優秀な成績を収めていた。この点は、機会を改めて検討するつもりである。

「軍隊と社会のはざまで」は、日本、朝鮮、中国、フィリピンの学校で実施された軍人訓練が、あるべき男性性やネイションへの希求と密接に関わっていたことを示した。明治初期の日本では体育＝兵式体操であり、それによって養成される軍事的資質は男らしさの重要な要素となっていた。徴兵制は男性性の点でも、国民と兵士を結びつける役割を果たした。第一次世界大戦後に平和主義が台頭すると、軍隊の存在意義が問われるようになる。拙著で論じたように、日本軍がスポーツを導入したのはそれに対処するためであったが、一方で日本軍は学校教練の導入を図った。学校教練に対しては大きな反対運動が起きたが、満洲事変を境に、日本の男性性はふたたび日本化＝軍事化していく。スポーツが排除され、教練が重視された。朝鮮は兵式体操を、まさに日本に抵抗する手段として活用したため、併合後は朝鮮人への体操教育が抑制された。しかし、朝鮮人の兵力動員が視野に入ってくるに従い、学校での軍事教練が強化されていった。中国では、日本に留学した人々が日本式の「軍国民」を中国に移植し、その名のもとに革命運動を展開した。植民地化された朝鮮と違い、近代中国は外敵に対する休みない抵抗のために、男性性の軍事化の必要性が盛んに唱えられた。しかし、日本と同じく、第一次世界大戦後にデモクラシーが流行し、兵式体操に体現されるような軍事的男性性への批判が高まり、その結果、アメリカに範を取った新しい学制により、兵式体操は廃止された。ただ、内憂外患が止まなかったため、軍事化への反発は一時的現象に終わり、1927 年に中国を統一した南京政府は学校に軍事訓練を再導入し、徴兵制を敷いて、強力な軍事的男性性の構築を目指した。東アジアに見られた軍事的男性性と国民国家形成の間の強い結びつき（軍事化されたモダニティ）は、アメリカの植民地フィリピンには見られなかった。フィリピンの学校における軍事訓練は民主主義的男性性の一要素と位置づけられ、アメリカに抵抗するためではなく、アメリカから一人前になったと承認されるための手段とみなされていた。それゆえ、軍事訓練は日本や中国のように国民（男性）にとって差し迫ったものではなかった。軍事訓練が本格化するのは、独立を控えたコモンウェルス期（1935-1946 年）になってからだったが、結局フィリピンはアメリカへの軍事的依存を克服できなかったため、軍事的男性性の構築を放棄することになった。第二次世界大戦後は、日本が脱軍事化するのに対して、戦前に軍事化されたモダニティを確立できなかった北朝鮮、韓国、中国、台湾、フィリピンの社会で軍事化が進んだ。

『軍隊とスポーツの近代』上梓後は、満洲の資料を収集してきた。まだ刊行には至っていないが、満洲では日露戦争のときから軍隊スポーツがおこなわれていたことが確認できた。内地や植民地と違って、敵対勢力に囲まれた満洲では、スポーツは軍民間の交流を図る重要な手段となっていたことが予想される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
① 高嶋航、「辮髪と軍服：清末の軍人と男性性の再構築」、『アジア遊学』、査読なし、2015 年 11 月号、119-132 頁。
〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　2　件）
① 田中雅一編、『軍隊の文化人類学』風響社、2015 年、349-418 頁（高嶋航「軍隊と社会のはざまで：日本・朝鮮・中国・フィリピンの学校教練」）
② 高嶋航、『軍隊とスポーツの近代』青弓社、2015 年、440 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高嶋　航（TAKASHIMA, Ko）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：１０３０３９００

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者

(　　)